

難病体験 前向き

挫折や夢 手記出版

大阪市出身で米ロサンゼルス在住の上原寛奈さん(40)が9月、難病と向き合いながら米国で夢をかなえるまでをつづった手記「車イスの私がアメリカで医療ソーシャルワーカーになった理由」(幻冬舎×デアコンサルディング、1296円)を出版した。挫折しても常に明るく前向きで、等身大の姿が共感の輪を広げている。

【林由紀子】

上原さんは4歳の時、免リウマチ(若年性特発性関節炎)の異常で関節に腫れや変節炎」と診断され、10歳形が生じる「若年性多関節」で車椅子の生活になった。



著書を手に見る笑顔の上原寛奈さん—大阪市西区で

大阪市出身 米在住 上原寛奈さん

入退院を繰り返しながら、院内学級や養護学校(現在の支援学校)で学び、府立高校へ進学。短大では仲間と街に繰り出したり、部活にいそしんだりと言葉を謳歌し、大好きな英語も習得した。

ところが、就職活動では

7年、透析クリニックで医療ソーシャルワーカーとして社会人生をスタート。患者に治療法を説明したり、カウンセリングで精神面を支えたりし、臓器移植のコーディネーターにも奔走した。「寛奈ほどの仕事に適した人はいないよ」。同僚にそう言われるようになり、病气や障害を自らのアドバンテージと考えるようになった。

障害が理由で壁に阻まれ、留学を決意。渡米後は病気をコントロールしながら猛勉強し、現地の大学と大学院を共に首席で卒業した。しかし、実習先の病院で、カルテの作成や書類の手続きに手間取り「不適合」のレッテルを貼られたほか、就職活動では米社会でも「差別」に直面した。

度重なる挫折体験を努力と熱意ではね返し、2003年の経験を経て歩み出した。